

新刊紹介

現代文化の哲人としてのカント

ハインリッヒ・リツケルト著
大江 清 一 譯

リツケルトの哲學者としての位置は、こゝに専新しく述べるまでもない。そのリツケルトの名著 *Kant als Philosoph der Moderne Kultur* を全譯したものである。この著は一九二四年にカントの誕生後二百年目の祝祭を動機として、「近代文化に深き關心を持つすべての人が、何故にカントを祝ふ動機を有すか」を示さうとして書かれたものである。「カントの學術的諸根本思想を誰れにも理解されるやうに説明しよう」としたのではないが、然しリツケルトは「カントの思想には廣く世人に近づけらるべき一面があるから、その點に彼れの論述を限定したので、只専門學者のみに論述を試みたものではないと明言してゐる。この意味に於て、哲學素養の深くない者にも、解するに苦まないものである。著者の言ふ如く廣く世人に讀まれていゝ、言はゞ通俗ならざる通俗書である。本譯書はこの書を全譯すると共に、特にこの譯文の爲にハイデルベルク大學講師ファウスト氏がこの書の續論的意義を以て、「ハインリッヒ・リツケルトと現代ドイツ哲學内に於ける彼れの位置」を題するドイツ文の論文を草したのを譯して卷頭に附してある。

譯文は極めて忠實に努めてあつて一字一句も雖も苟くもしてないやうである。このファウストの論文を大江氏がわざわざ請うて加へられたのを見ても、深切な譯書であることは明らかである。終りにリツケルトの主要著述を分類して列舉し、日本譯あるものは、譯書名、譯者出版所まで書添へてあり、又卷頭にリツケルトの令息が作つた父の胸像の寫眞を添へてあるのも、心床しい試であつて、いかにも念を入れた、所謂「凝つた本」であると思はれる。

けれども譯文は必ずしも流暢とは言へない。原書の一句は必ず一句に、一文は必ず一文に譯し、代名詞はその代名詞に、副詞はそのまゝ副詞に譯するといふ態度であるが、ドイツの副詞を日本語では形容詞なり動詞なりに換へた方が却て解し易いことも有らうし、殊に代名詞は我が國では性の別がなく且つ代名詞の指す名詞との距離が譯の都合で非常に離れたりする事があるから、代名詞をそのまゝ、代名詞に譯するなどの名詞を指してゐるのか、解りかれる事が少くない。むしろその指示する名詞に譯しかへて致く方が讀者には便利である。

さばれ、私は歐文の名著が、大江氏の手によりて我が國に移し植ゑられた事を喜ぶことを明言して置きたい。(菊版四一〇頁、定價貳圓八拾錢、東京市麹町區内幸町、内幸ビルディング、理想社出版部發行)(高橋)